

正確に描いた阪神大水害



阪神大水害で被害を受けた芦屋市内の様子。家が屋根近くまで水没している＝1938年(芦屋市提供)

強まり始めた人災の側面

文豪谷崎潤一郎(1888～1965年)の「細雪」は、自身の妻とその姉妹たちをモデルに、リアリティを重視して書かれた小説だ。物語が展開される期間は、1936年から太平洋戦争前の41年春までで、実際の出来事も多く登場する。その一つに、70

の副館長で武庫川女子大名誉教授のたつみ都志さんは「作者本人は運よく被害を免れました」と話す。あえて水害を書いた理由の一つは、リアリズムの追求。正確にこだわった谷崎は、娘の通う小学校の文集まで調べたという。

「いま水害が起きれば、もつと被害は大きいでしょう」と話すのは、阪神間で生まれ、現在も暮らす大阪府立大教授(比較文学)の堀江珠喜さん。「人口が増え、居住エリアが広がった。水の流れを妨げる障害物も増えた。そもそも電気に依存する私たちが自身が非常事

534
いま
解き「細雪」
<下>

態に弱くなっています」文学と災害の関係は古い。例えば、鎌倉時代の「方丈記」。嵐や飢饉、地震による被害が、人の世の流転を説く言葉とともに記録されている。「人が自然とともにあった」方丈記の時代と比べ、「細雪」の水害の場面からは、現代に通じる人災の側面が見て取れます。それは、経済発展とともに強まり続けてきたと指摘する。「最たるものが、原発事故を伴った2011年の東日本大震災でしょう。私たちが何を失ってきたのか、考えさせられますね」